

菟集 山川方夫

「これだよ、私をだましてくれるものは」

淡々と、老婆はいった。

「私も、はじめは私をだますものが憎かったよ。こいつがいけないんだ、こいつが私をだまし、ありもしない繋がりやばかげた夢の中に、私を引きずりこんでしまう根っこなんだ、こいつこそが、私にさまざまな幻影をみせる根っこなんだ。こいつさえなければ、って私はよく考えたものさ。それで、私はそれを片端から切り落して、男たちから貰ってしまうことにしたのさ。……でもね、今になると、だまされないということはつまりないもんだ。つらくて、退屈なものさ。そして、これも記念だ。……私はこれを見て、これにだまされていたころの自分を思い出して、いまじゃ一人でたのしんでいるのさ。いまはね、これをあつめるの

が私の道楽だよ。ときどきこれを眺めては、私は、私をだましているのさ」

恐怖と驚愕に腰を抜かしたまま、彼は、干からびて縮んだキノコに似たものの列の中に、一つだけ褪せたように色の淡いのをみつけた。ふと、極端に人づきあいをきらい、独身のまま死んだ色白で小肥りのボーモン、女のようにすべすべしたその肌を、彼は思い出した。

重い風の音のような理解が彼を通りすぎた。

「……私は、お金なんかいらなのさ」

色の黒い顔じゅうを皺で埋め、歯のない桃いろの唇をあけて老婆は笑いかけた。

毛穴という毛穴から汗がぶつぶつと吹き出し、しかし、サンバードは動くことができなかつた。腰が抜けていたのではなかった。痺れは、もはや手脚の先端にまで来ていた。

「安心してらんだよ。生命には別条ないんだからね」

やさしい声音でいい、老婆は腰をのばし、戸棚から小さな精巧な造りの瓶を出すと、ゆっ

くりと彼に近寄り、その顔を仰向かせて、黄金色の液体を、瓶から彼の唇のあいだに滴らせた。かすんでゆく視野のなかで、ジョージ・サンバードは、だが必死に目をこらした。そして、かろうじて声を出した。

「……その瓶も、あなたがつくったのか？」

老婆は、また薬液を彼の唇に滴らせた。

「そうとも。……この薬だって、私がツヴァの根を煮つめてつくったのさ。いいかい、もうすぐ、なにもかもわからなくなってしまいうからね」

サンバードは、強烈な匂いの薬液にむせながら、全力をふりしぼってわめいた。

「……それもだ。その瓶もいっしょにくれ」

老婆は、白くまるい目をむいて彼をのぞきこんだ。

「これもかい？」

「そうだ。……あなたのほしいものはあげる。でも、大きな壺といっしょに、ぜひその小さな瓶も私にくれ。……すばらしい、すばらしい傑作だ、それは。……」

網膜に不透明な藻のようなものがゆらめきだし、意識が消えかけた。だが、サンバードはけんめいに目を見ひらき、急激に暗くぼやけてゆく視野の幕の彼方で、丸顔の老婆が大きいくうなずくのを見た。よろこびが、彼の胸を充たした。

そして、彼は目をつぶった。